

自由原稿

カラカミ遺跡の弥生製鉄ニュース

新井 宏

「トンボの眼」という会があり、理系の視点から見た考古学の論争点」と言うシリーズで連続五回の講演をしている。明後日(三月四日)は、その最終回で、弥生時代には製鉄が行われなかったか」というタイトルで話す。

実はこのタイトルを決めたのが、昨年十一月末であるが、その直後の十二月中旬に、沓岐のカラカミ遺跡から弥生時代の製鉄遺跡が出土したというニュースが飛び込んできた。早速、数人の方からやはり新井さんの言っていた通りでしたね」とのメール等を頂いた。

日本では、製鉄開始は古墳時代後期の六世紀からというのが定説である。それに対して、私は十年以上前から強い疑念を表明していた。理由は、前三世紀から「鉄の使用」を始めていながら八百年間も「製鉄技術を持たなかった」とすれば、歴史学や考古学はその理由を説明しなければならぬからである。しかも、弥生後期から磨製石器の使用が大幅に減少する現象があり、考古学関係者も「製鉄技術」の存在を待ち望んでいた。

しかし、そこに立ちはだかったのが、古墳中期以前の鉄滓はすべて「製鉄滓」ではなく「精錬滓」であるという分析系の金属学者の見解である。

それに対して私の反論は、彼らがあまりにも

「たたら製鉄」の経験から学び過ぎているという点にあった。たたら製鉄」は明治末年まで続く近代的な製鉄法であり、古代の小規模な製鉄法とは大きく異なる。

事実、中世までのヨーロッパでは、製鉄と精錬を同じ炉で行っていた。そのため古墳中期以前の鉄滓をヨーロッパの基準で判定すれば、「製鉄滓」とも「精錬滓」とみなせる場合が多い。だから、経験論によって鉄滓を判定するのではなく、炉の大きさや鉱石の種類を考慮し、それを製鉄理論に基づいて解析しないと判定を誤ると言い続けてきた。第一、「精錬滓」と判定された鉄滓の多くが、中国地方の山間部や阿蘇山麓など内陸から出ており、粗製の鉄素材を輸入して運び込み、そこで精錬することなど不自然である。

さて、新聞のニュースを要約しておこう。

魏志倭人伝の一支国「カラカミ遺跡」の竪穴遺跡から、国内初、弥生後期の鉄生産用の地上炉跡(六基)が見つかった。炉形式が韓国南部にみられる炉に似ている。従来、日本の製鉄の始まりは六世紀後半とされていたが、定説の見直しにつながる発見である。

この記事を読めば、誰でも「弥生時代に製鉄が行われていた」と思うに違いない。しかし学術的に言えば、これで弥生製鉄が実証されたわけではない。うっかりすると、逆に振れすぎるのが考古学界である。これからもよく見て行きたい。